

鉢伏山開き

平成十八年五月二十一日には鉢伏山開き六十周年記念祭典が兵庫県香美町で執行されま

す。この記念の祭典執行を前に「鉢伏山開き」の歴史をふり返ってみましょう。

但馬の国の霊峰・鉢伏山は、標高一、二二一メートル 兵庫県美方郡村岡町兎塚にあつて、「氷ノ山後山那岐山国定公園」に属していて、但馬、因幡、美作、播磨の国々にながく裾野をひき、須賀ノ宮居・八尋殿の跡を伝える須賀山や氷の山（ひょうのせん）と相對峙しています。

この鉢伏山は、大本との神縁が深く「大本教法」第六章（おほもとのりと参照）には霊場の一つにあげられています。

この付近の地質は、但馬では唯一の古第三紀地帯にあたり、五百年前から一千年前（新第三紀）の間起こった地殻の変動によつて、鉢伏山系ができ、妙見山系が隆起してできたものといわれています。また地質学の池辺展辺教授は、この近くの昆陽川の上流で海底流痕を発見し、古代の村岡町は海底であったといわれていますが、聖師さまは、昭和二十一年の鉢伏山開きの日に「太古は海底であった」とお示しになっています。

また鉢伏山周辺には、早くから人類が住みついていたことが、近年発掘された縄文土器から推定されます。八鹿町や関宮町をはじめ村岡町に遺跡が点在しとくに関宮町別宮の家野遺跡からは、兵庫県では最古といわれる八千年前のものが発見されています。

竜宮神社（りゅうぐうじんじや）

「但馬には、どえらい尊い神さまが鎮まっていますので、早く開いて下されよ」

とかねがね開祖さまからお聞きしていた湯浅仁斎宣伝使は、大正時代の初期からこの地方をおとずれ、調査と宣教を続けていました。

大正九年（一九二〇）九月、鳥取へ向かう途中、大笹集落の田淵光太郎宅へ寄りましたところ、夕やみの庭先に何か黒い大きなものが立ちふさがっていますので、よくみると大きな竜神さまのお姿にみえました。おどろいて近づくと、そこには黒い大きな岩がありましたので、その家の主人に「竜宮の乙姫さまが鎮まっておられる岩だと思えますので、きれいに清掃しておわびをなさい」と話しましたところ、主人は何のことかわからぬままに、数人の大本信徒とともに掃除をすませました。そして、湯浅宣伝使が先達をつとめ、おわびの祈願祭を行いました。

ところが祭典が終わると、うしろに髪をふる乱した女性がいましたので、そのわけを聞きますと「私は三ヶ月ほど病床に伏していましたが、みなさんの祝詞の声で不自由だった

身体が急にらくになり、じっとしておられず思わず床をぬけ、こうして参拝させていただきました。もうすっかりよくなりました」と涙ながらの話でした。

一同がこの大きなご神徳に感謝していますと、この家の老婆が一枚の古文書をさし出し「先生、あの岩が竜宮さまに見えましたか。どうぞこれをごらん下さい」といいました。それには、

「天文十五年（一五四六）八月十二日から十八日までの大雨で大洪水になり、大笹集落が流されようとした時に、田淵家の先祖が持っていた白銀をこの岩の上からお供えし、竜宮の乙姫さまに一心不乱に祈願をしたところ、大水はこの岩から方向を変え、集落が助かった」

という故事が記されていました。さらに老婆は「かつてはこの岩をご神体にしてお祭りをかかさなかった時代もありましたが、いまではそれも迷信あつかいにされ、岩の上に堆肥を積むやら薪をおくやらで汚れてしまいました。そして、今日まで病人の絶え間がなく、困り果てていましたが、いまのお祭りで私の家も救われました。竜宮さまも大へんおよろこびになっていただけることでしょう」と話し、幾度も礼をのべたといえます。

それ以来、その家の主人も信仰に励むようになり、当時六十戸の集落のうち二十数戸が大本信徒になりましたが、第二次大本弾圧事件にあい、竜宮さまのお祭りもとだえていました。

それをみかねた地元の信徒・西谷進氏ら有志の人々によって新たに岩上に神祠を造営し、昭和十九年（一九四四）十月十五日に乙姫さまを鎮祭しました。現在のお宮は昭和四十五年に綾部の梅松苑で造ったものです。

ちなみに竜宮の乙姫さまとは、
「竜宮の乙姫ととなうるは、神典に見えたる豊玉姫の御事なり」（道のしおり）とあり、また「玉依姫命」とも申し上げます。

なお、この神さまについて聖師さまのお筆で、
「経済をつかさどり、国家を富裕ならしめ、財宝をさづけ、また海陸交通の安全、商業の発達をまもり、個人にしては住む家、食物、着類などを豊かにあたえたまう大神にして大富開運の守護神なり」（神の国・大正十一年十一月十日号）

とあります。さらに「大本神論」には、

「竜宮の乙姫殿を見て皆改心をいたされよ。昔から誠に欲な醜しきお心でありたなれど、今度の世の立替えには欲を捨ててしまわねば、神界のご用が勤まらんということが、一番に早くご合点がまいりたから、竜門のお宝を残らず良の金神にお渡しあそばして、活発なお働きを神界で一生懸命になって、力量も充分あるなり、この方の片腕になって、今度の世の立替のご用をあそばすから、ほかの守護神も竜宮さまのご改心をみて、一日も早く自

己の心のなかを考えて、改心をなされよ」(大正一年旧八月十九日)

とありますように、私たちは竜宮の乙姫さまのご守護をいただき、同時にご奉仕の誠にも神ならわせていただきたいものです。

鉢伏山開き

竜宮神社のご鎮祭以来、地元の信徒間で鉢伏山にも神秘的な意義を感じはじめていました。鉢伏山は「八伏」とも書けますし、この山を源にして流れています川は、南は「八木川」、正面は「矢田川」、村の産土神は「八千錡の神」、鉢伏山の玄関には国鉄「八鹿駅」、鉢伏山の東側には鳥取県の「八頭郡」、八鹿町は「養父郡」というように、八の字に関係のある地名が多く、但馬の竹田城趾は虎臥山、綾部の本宮山は桶伏山といい、ともに大本にとって神縁の深いところから、鉢伏山も何か神秘的な因縁があるものと考えようになり、また古者たちから毎年旧正月元旦には鉢伏山の山頂に火がともる、頂上には不思議な形をした岩があるなどと聞かされていたので、登山して実地踏査してみようということになりました。

そこで昭和二十年(一九四五)三月二十日積雪ののこる山に登ったところ、古老のいう「こつとい(牡牛)岩」をはじめ、「みろく岩」「大亀岩」「牛伏岩」「虎伏岩」「陰陽石」などの神岩霊石を発見しました。その報告を聖師さまにお伝えしましたところ、出雲大社にご参拝の帰途、お立寄りになることになりました。

昭和二十一年(一九四六)五月二十二日、聖師さま、二代教主さまらのご一行は、国鉄八鹿駅から村岡町の福岡まで自動車でおこしになり、そこから山籠で大笹の西谷進氏宅にお着きになり、竜宮神社にお参りになってご一泊されました。

翌二十三日には、但馬竹田にお住まいになっておられた三代教主さまが、おこしになり、馳せつけた役員信徒ら数十人がお供をして、大笹から登山されました。

栃、櫟、柳の老樹の生い繁った原生林を伐り開き、六キロあまりの山道がひらかれましたが、倒れた古木の下をくぐり、途中、一の滝・二の滝を過ぎ、長い道のりの困難な登山でした。

山頂では鉢伏山開きの祭典がおごそかにとり行われました。こうして千古を秘めた神山も聖師さまによって、めでたく開かれました。

「鉢伏山は、太古、日本海底の最深地点、竜宮の大黒柱の立っていたところで、地殻の大変動によって爆発隆起し、現在のお山を形造ったものである。主の大神さまが鎮まり、八力の大神ととなえ、お山全体が御神体である。山頂から裾野一帯にある神石霊石には、一々深い謎が秘められてある。陸の竜宮の奥の宮としての霊地であるから、記念祭のほかは遙

拝し、みだりに登山しないように・・・」

と聖師さまは述べられています。

さらに二代教主さまは、

「ふたむかしの夢が、いま実現いたしました。ある日の夜あけの夢に、十丈（三十メートル）ほどもある岩がうなりをたてて私を迎えにまいりました。どこからともなく神さまのお声なきこえ、「これに乗れ」とのお言葉。その岩に乗りますと、海の上を走るその音は竜の声でものごい尊いお声でした。そして天空を駆けめぐって、私がつれて行かれたのが、このたびまいりました鉢伏山でした。それが、これと寸分ちがわぬ形の岩でありました。夢のなかでは、その岩を「竜宮の乙姫」ととなえております。そして、岩を竜がとりまいていました。

私は竜の岩に乗って陸の竜宮の山々を駆けめぐって、これで用事がすんだと思うと、もとのところに、うなりをたててつれて帰られたところで目がさめました。

教祖のお言葉に『けっこうな神さまの落ちておいでますところが、かくしてある』と言われたことが、このところであるとようやくわかりました。『竜宮のお宝、出口の神におわたし申す』とのお筆先の実地がこれでわかり、夢の謎がとけました」

と話され、聖師さまも、

「竜宮岩は、地軸より生え立っており、その一部が現れておるのである。竜宮の乙姫さまのご神体である」

とお示しになりました。

鉢伏山開き後の昭和二十一年六月四日、綾部の本宮山上に最高至聖所の月山不二が完成しましたが、その日、聖師さまによって富士の神霊とともに鉢伏山の神霊が鎮祭されました。聖師さまのお歌に“鉢伏の山の神霊もろともに月山不二にまつりたりけり”とあります。

歌碑と石の宮

昭和二十四年（一九四九）二代教主さまには、竜宮岩の下にある池を「銀竜池」と命名され、ついで昭和三十九年（一九六四）十二月二十三日には、地元信徒の念願でありました二代教主さまの

はちりきの はちふせやまの はちびらき

あげのりうぐう おくのみやなり

という歌碑が建立されました。